慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	再談殷代氣候, 董作賓著(華西協同大學中國文化研究所集刊, 第五卷民國三十五年(一九四六))
Sub Title	
Author	中井, 芳雄(Nakai, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.2 (1951. 11) ,p.123(250)- 126(253)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19511100-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生活」(歴史語言研究所集刊一一)等の獨立論文を續々發表してをられる。これらの考證が直接に漢代史の解明に役立つことは勿論であるが、釋文は正に漢代史研究の寶庫となるであらう。

なほ最近、本書の新版が出たやうである。初版に多少見受けられる譌誤も新版では改訂せられてゐると信ずるが、未見である。

(和田　博德)

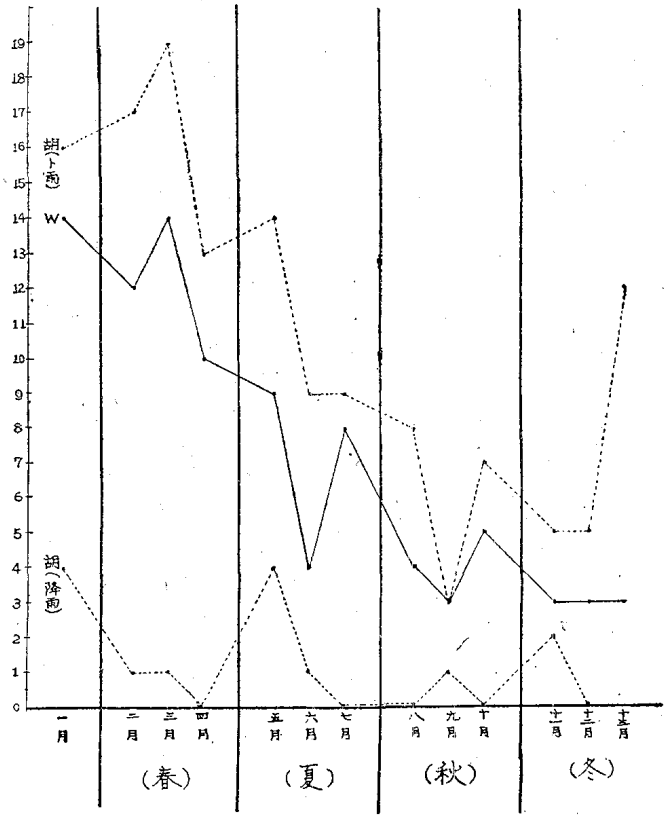
再談殷代氣候

董作賓著(華西協同大學中國文化研究所集刊第五卷民國三十五年(一九四六))

古代中國の氣候、さらに紀元前二千年頃の東亞の氣候が、現在より溫暖であり、濕潤であつたと云う說が、アンダーソン氏以來多くの學者により提唱され、日本の學界も又それに支配されているようである。最近ではウイトフォーゲル氏が「商代卜辭に現はれた氣象記錄」(Karl August Wittfogel, Meteorological Record from the Divination Inscriptions of Shang. The Geographical Review 1940, Jon. pp. 110—133)(邦譯、鈴江言一譯、滿鐵調査月報、第二十二卷五號、昭和十七年五月)なる論文を發表し、殷虛發掘にかかる約一万四千五百の卜辭の內から、月日の記してあるもの三百十七條を選び、天候、農業、政治等に分類し、統計を作り、そして特に降雨の回數が冬期に多い所から、「この一番寒い季節が比較的に暖く、その爲めに收穫並に農作上の雨に對する關心が明らかに、非常に早く始まると思はれる。」「冬季の雨は當時の溫度が、現今の北支那地方の一般的な氣溫よりも、多少高い事を物語ると考へられる。」と結論している。

この論文に對し、中國の甲骨文字の研究家として著名な董作賓氏が、反駁を加えたものが、卽ち本論文である。

Wittfogel・胡厚宣兩氏卜雨辭統計表



董氏はこの論文で、ウイトフォーゲル氏の論文と同時に、胡厚

宣氏の「卜辭中所見の農業」「氣候變遷と殷代氣候の檢討」及び「殷卜辭中雨雪の記載に關して」（註一）の三編をも合せて批判して、兩氏の結論である「殷代氣候は現在よりやや溫暖である」（ウ氏）「今日に比べはるかに暑い」（胡氏）に對し、同一材料である卜辭を深く檢討する事により、現在とあまり變化の無かつた事を立證しようとしたのである。

ウ・胡兩氏は卜辭中から月日の記載があり、降雨に關する卜辭を集め、それを一つの統計表にまとめた。勿論卜辭はその性質上、實際に降雨を示しているものは極めて少なく、單に「今日雨が降るか？」と云う樣な、豫想の問いをするだけであるが、ウイトフォーゲル氏は「然し、經驗なるものが、設問者をして、毎年其頃には屢々雨が降るものだ、と云うことを確信させなかつたとすれば、占卜は無意義な事となるだろう」「從つて天候豫想が實際上當時の氣象經驗を反映するものと假定することは、正しいと云い得よう」と云う合理的な解釋を下し、胡氏も又「すでに雨を卜した以上。其時に必らず降雨の可能性があつたと云う事を知る可きである」と考へて、卜辭に現れた降雨を、現在の測候所で行う雨日の記錄の如く、その回數を統計したのである。（圖參照）胡氏は卜辭に對し實際に降雨のあつた徵驗の辭を併せ統計している。そしてこの表から、殷代は一年中雨の降らない月がなく、しかも現在華北では、冬期に雪は降つても雨は降る事がない乾期であるのに、

殷では却つて冬期に多くの雨に關する卜辭を見る事が出來るのは、冬春多雨で今日より溫暖である事を示すと考へたのである。しかし董氏はそれを再檢討し、例へば胡氏が「卜雨があれば、必ず降雨の可能がある」と云うのに、表では九月が卜雨の最少で降雨が一回あるが、四・七・八・十・十二・十三月が零であるのは如何に解釋すべきか、又冬期に多雨、それ故殷代は今日より暑いとするが、六月から十二月にかけ最も雨が少ないのは何故であろう、殷代は夏秋雨が少なく、今日より寒いと云えるのではないか、さらに史料である卜辭を深く檢討して行くと、例へば「今十月に雨が降るか？」と云う卜辭は、設問者がこの樣に一ケ月の長期に汎つて降雨を卜したのは、彼等の經驗が反映して、雨の少い季節である爲にこの樣に長期に汎つて卜したのである、又同じ甲骨版上にある二つの日付のある卜辭は、一月の或る日に「五日間の內に雨が降るか？」を卜し、それから二十日をへて、なお降らなかつた爲に雨乞の舞を奏した事を示しているのは、如何に一月に雨が少く、殷人が降雨を望んでいたかを證明するものであるとし、ウ・胡兩氏が卜辭の持つ內容、意義についてあまりふれていない事を指摘した。

ウイトフォーゲル氏は、卜辭の中に雪の降つた事を傳へたものを、三月に一條だけ取上げ、それは特に寒冷な或る一年のもので、三月の雪は一種の不吉な現象として、特別に取扱い「假りに雪が

時々降つたとしても、冬期の雨は、當時の溫度が現今の北支那地方に一般的な氣溫よりも、多少高いことを物語る」と考えた。胡氏はその月が三月である所からこの字を雪とせず、綏と讀んで(何故綏と讀んだのか理由がはつきりしないが)、當時は雪が降らなかつたと考へ、それ故今日よりはるかに暑いと結論したのである。

これについて董氏は、甲骨文字の雨の字を檢討した。雨の字には三種の用法があつて、一は名詞、一は動詞で降る事を意味し、三は動詞名詞の一諸になつたものである。それ故、その場合によつて意味する事が異り、冬期に於ては降雪をも包括すること、雨一字が降雨と共に降雪をも含む例を春秋の中から擧げて説明し、又甲骨文字中今まで雹と讀まれていた字が、殷虚十三回發掘の内に、雪と一諸に用いられている事に注意し、雹は夏に暴風雨と共に降る事はあつても、雪と一諸に降る事はない。雪と一緒に降るものは霰である。しかもその字を有する卜辭をさがすと、十月から三月に至る間のものだけである點からも、この字は霰でなければならぬとし、この字も又雪と同じく常には用いられず、雨の字の中に包括されていたとしている。

雪に關しては、董氏はさらに、四月五月に各一條を擧げ、三、四、五月に雪が降ると云ふ事は、殷の曆が年末に閏月を置く爲に、必然的にずれてきて、例へば現在陰曆三月にある穀雨、清明などが武丁二八年には五月八日穀雨、武丁二九年は五月四日穀雨、五月十九日清明となつている事は、五月にも雪の降る可能性のある事を裏付けるものであると述べている。

次で胡氏が三月に大雨のあつた例として擧げている卜辭に對しては、卜問と實際的に降雨のあつたことを記した徵驗の辭とを混同している事を指摘している。

そして最初に擧げた、一ケ月の内に雨が降るかと云う長期に汎つて問うたものと、霰の卜辭、多雨と大雨を望んでいる卜辭(例六條)が十月から三月にかけてだけ見られる事、反對に雨を恐れている卜辭、九月に十八日間連雨の卜辭、六月に長雨を問う卜辭、並びに天候の晴れる事を望む卜辭(例十條)が四月から九月に至る間にのみ見られる事は、現在の華北の冬春は雨が少なく、乾期であり、夏秋は雨が多い氣候とあまり變化がない事を證明すると考へられるものである。最後に殷虚から象、獏等の南方動物の骨格が發掘された事は、ウイトフォーゲル氏もそれほど重要視していないし、董氏も同じ所から寒帶動物たるウスリー熊、貛等が發見される事と、その引用書たる「安陽殷墟の哺乳類動物群」の著者であるテイヤール・ド・シャルダン、揚鐘健の兩氏も「但し鯨の骨が殷虚から出る事は安陽動物群の複雜性を證明し、人工運搬により來つたものである」と述べているところから、これをもつて殷代の氣候を論ずる事は出來ないと考えて、次の如く結論している。

「我々の殷代氣候の研究の主要材料は卜辭であるが、卜辭によつて『雨日』の統計表を作る事は不可能である。そして卜辭によつて示されている殷代の氣候は、現在の黃河流域と甚しき差は認められない。この事は冬春二季が寒冷であり、雨量が少く、夏秋二季は炎暑で雨量が多い。この樣に冬が現在より暖か或は暑いと云う事を證明するものを見出だす事は出來ない。これが卜辭の實體である。この他ウ氏の擧げている軍事行動、旅行は別に論ずるとし、胡氏の農業生產に於る栽培と收穫、森林と草原、稻の生產、水牛等は皆枝葉末節に屬するから、一切除外した」。

以上が董作賓氏の「再談殷代氣候」の內容の大略であるが、ウ・胡兩氏が卜辭を、それが資料として唯一のものであるが、資料としては決して完全なものと云えないにもかかわらず、單にその回數を統計し、「卜すれば降雨の可能性がある」と云う合理的解釋により、殷代の氣候を暖か及至は暑いと斷定したのに對し、董氏はその學問的立場から、卜辭の一つ一つの持つ內容、甲骨文字の意味を深く再檢討する事により、前二者と同一の材料を使用しながら、全く反對の結論を立證する事が出來たのである。

殷代の氣候さらに紀元前二千年頃の東亞の氣候が、現在と差違が有つたか、又無かつたかに就いては、なお今後各方面から、論議されねばならないが、董氏の行つた研究法は、その結論の如何にかかわらず、正しい態度であると云う事が出來る。

註一、前二篇は甲骨學商史論叢第二集後者は學術と建設第一期第二集所收

（中井　芳雄）

彙　報

昭和廿六年春季早雲寺見學旅行記

昭和廿六年六月九日、夜來の雨がまだ少し殘つている中を、伊木先生始め竹田河北兩先生及び學生十數名新宿驛より小田急にて箱根湯本の早雲寺に向う。

早雲寺は小田原北條氏の香華所であり北條氏綱が亡父早雲の志を繼いで大永元年にこゝ神奈川縣足柄下郡湯本町に創建したものである。後豐臣秀吉の爲に一族亡びるや當寺も又廢寺同樣となつたが慶安元年德川家光の再興する所となつた。

先づ境內の見學から始めることとした。

一、鐘樓　鐘は元德二年に鑄造されたものといわれ、天正十八年豐臣秀吉は石垣山にてこの鐘を陣鐘として用いていた。後小田原城內の時の鐘となりついで當寺に置かれるようになつたという。

一、北條五代の墓　本堂の裏手に北條五代卽ち早雲　氏綱　氏康